
この夢に終わりを

桶十芭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この夢に終わりを

【Nコード】

N2888A

【作者名】

桶十芭

【あらすじ】

人間と吸血鬼が共存する世界。彼等は工夫を凝らし平和に暮らしていた。二つの種族が入り混じる世界。恐怖の潜む世界。空に作った工夫はそれをしっかりと包み込んでいた。しかしその恐怖は、ある日突然人間を襲う。

piece 1 : 世（前書き）

アドバイスが頂けたら嬉しいです。

piece 1：世

僕等が生きるこの世界は

二つの種族が共に生きる世界

僕等はうまくやっていた

それなのに

「ユト！」

大声で僕の名前を呼びながら、友達のレンが走りよってきた。
真っ青な瞳が真っ直ぐ僕を見る。
僕の金色の瞳を。

「どうしたのレン？」

「いや…どうしたってわけじゃないんだけど…大丈夫？」

「大丈夫って…何が？」

「え、と…もうすぐ…満月だから…」

満月、という言葉聞いてレンが何を心配してるのかわかった。

僕が暴走しないか不安なんだ。

「大丈夫だよ。僕は完全な吸血鬼じゃないんだって何度も言ってるじゃない。」

「うん…わかってるんだけど不安で…ユトは大切な友達だからさ、そんな風に別れたくないんだ。」

携帯電話やパソコン、冷蔵庫なんていう電化製品が出回っていたのが数百年前にもなる世界。

僕達はこの世界で暮らしていた。

この世界は、二つの種族が入り混じった世界。

一つは人間、一つは吸血鬼。

どの時代からそうなったのかはわからない。

もしかしたら携帯電話が出回っていた時代から吸血鬼は少し混ざっていたのかもしれない。

そうなのかはともかくとして、僕達は種族の差別もなく、平和に暮らしていた。

とはいえやっぱり問題はあった。

それは、吸血鬼の暴走。

何百年も前に発見された本に、『吸血鬼は月が満ちる夜悪魔へと姿を変える』と書いてあった。

これは、この世界じゃ常識。

つまり、満月の夜に吸血鬼が暴走するってことで。

満月は時が来れば必ず空に姿を現す。

その度に吸血鬼が暴走したらこんな世界は存在しない。

そこで人間は考えた。

吸血鬼に満月を見せなければいい。

人間ってのは凄い生き物だ。

解決策を見つけたら、どんなに時間をかけてでも作りあげる。
空に貼るフィルターなんかよく作ったものだ。

満月の夜だけ空にフィルターを貼って、月の光が届かないように。

それは、僕が産まれた時からそうになっていた。

だから僕や僕の世代の人間と吸血鬼は吸血鬼の暴走というのがどんなものか知らない。

知らない方が当然幸せなのだろうけど。

その辺りを見回せば、人間と吸血鬼は普通に会話をしている。

種族の違いなんて忘れてしまうほど自然に。

それでもやっぱり人間は怖いんだろう。

カレンダーには全て満月になる夜が記載され、毎日のニュースではあと何日で満月か放送される。

まあ吸血鬼が暴走なんかしたら命が危ないってわかってるから当たり前なんだろうけど。

「ユト…？」

「え、ああ、大丈夫。」

「うん…」

レンは人間だ。

見分け方は簡単。

瞳の色が青か金か。ただそれだけ。

僕の瞳は金色。

だけど僕は吸血鬼じゃない。

吸血鬼と人間のハーフ。

だから、満月でも暴走しない。

それはちゃんと証明されてる。

それでもレンは毎回満月の前には僕に確認してくる。

レンは僕にとつての親友で、きっとレンもそう思ってくれてるはず。
だから不安になるんだろうな。

「大丈夫だよ。それに満月になってもフィルターがあるんだし。
一緒に帰ろう。」
…

「うん！」

そう。大丈夫。

たとえ吸血鬼が暴走しても、僕がレンを守る。

piece 2: 愛 (前書き)

ユトと母親の会話です。

piece 2: 愛

ねえ 母さん。

母さんはどうして父さんと結婚したの？

それはね、父さんを愛していたから。

でも、父さんは吸血鬼だよ？
恐くなかった？

ええ。大丈夫。
だって愛していたんだもの。
恐くなんてなかったわ。

満月の夜も恐くない？

恐くない。父さんはね、言ってくれたの。もしも他の吸血鬼が暴走しても、自分は君を守るって。

そうなんだ。

父さんは優しいもんね。

そうよ。

ユトは父さんが怖い？

恐くなんてないよ。
だって優しいもん。

吸血鬼だけど恐くない？

うん。父さんなら大丈夫。

それはね、ユトが父さんを愛しているからよ。
父さんが、好きだから。

そっか。愛って凄いね。

そうね。ユトはまだ小さいけれど、大きくなれば誰かを愛せるようになるわ。

誰かを？誰かな？

誰かしら。

見つかったら父さんや母さんに教えてね。

うん。

さあ、もう寝なさい。
愛しているわ、ユト。

僕も。おやすみなさい母さん。

母さんは父さんを愛していた。
父さんも母さんを愛していた。

でも母さんは父さんに殺された。

父さんは言っていた。

愛していたから殺したんだよ。
他の誰かに殺されるくらいなら、
父さんに殺された方が母さんも幸
せだよ。

って。

僕には わからなかった。

不安になった。

僕も、自分の愛した誰かを殺すときがくるのかと。

piece 2 : 愛 (後書き)

まだ話がよくわからないかと思えます… (汗)
これから連載頑張っていきます。

piece 3：常

「ユト学校行こう!」

ぼうつと宙を見ていた僕の耳に、レンの明るい声が届いた。

窓の外を見れば、レンがぴょんぴょんと飛び跳ねてこっちに手を振っている。

レンって少し子供っぽいんだよねあ…。

純粹で素直だから誰にでも好かれるんだろうけど。

「ユト早く〜!」

「ごめん、すぐ行く。」

レンに急かされて、玄関を開けた。

空を見て 思う。

もうすぐ満月だ。

外気に晒された僕の掌をぐいと引く暖かいもの。

レンの体温。

「早く!」

「…うん。」

「あつ。…おはよう。」

おはようをいい忘れたことに気付いて、レンは恥ずかしそうに笑った。

今日もいつもと変わらない朝。
レンと一緒に学校へ向かって、そこに着けば沢山の友達がいて。
何気無い日常。

僕はこの日常が好きだ。
毎日そんなに変わらないけれど、このままでいたい。

「もうすぐ満月だね。」

誰かが言った。

多分今誰もが思っていること。
けれど皆レンほどは心配していないみたいだ。
フィルターがあるから。

吸血鬼が暴走することは、無い。

何年も平和が続いているのがその証拠。

満月を意識しても不安に思う人は少なかった。

「あと二日だな。」

街で人々がそんな話を始めた。

満月前には必ず見られる光景。

ただひとつだけいつもの満月前と違うことがあった。

それは、天気。

満月になる前の一週間は決まって晴れていた。

それなのに昨日も今日も空は重そうな雲に覆われていた。

それがよけいにレ^ンを不安にさせたようで、ずっと塞^ぎこんだままだった。

piece 4 : 夜

母さん、満月だね。

そうね。

でも空は真っ暗だね。

そうね。

ねえ母さん、父さんはまだ帰ってこない？

そうね。きっともうすぐ帰ってくるわ。

ただいま

ほら帰ってきた。

ただいまユト。

おかえりなさい父さん。

おかえり貴方。さあ、ユトはもう寝なさい。

うん。おやすみ父さん、母さん。

どうして？私は貴方を愛してる。

俺も愛している。けれどもう…

…父さん？母さん？

ドアの隙間の僕の瞳に映ったものは

赤い赤い水しぶき

ごとりと床に倒れた母さんの細い体

それは父さんが母さんを殺した満月の夜の事。

pieces:雪

僕は君を守りたい。

■
□
■

「あ…雪…」

レンの言葉を聞いて空を見上げると、白い粉雪が落ちてきた。
まだ10月だ。

別にこの国は寒い国でもない。

どう考えても早すぎる雪に驚いたのは僕とレンだけじゃなかった。
街中がどよめく。

喜ぶ子供、身を寄せ合うカップル、積もるだろうかと心配する大人。
人々の反応は色々だ。

「…不思議だね…雪が降ってるのに空は晴れてる。」

レンが言う通り、空には太陽がしっかりと姿を見せていた。

だんだんその太陽は沈み始め、太陽の代わりに街のネオンが雪を照らす。

雪は綺麗なのに、なんだか少し嫌な予感がした。

「…もうすぐ太陽が沈むね。」

ポツリとレンが言った瞬間、空は一瞬にして真っ暗になった。真っ暗になったのはフィルターがかかったせい。空は暗いけれど、街は明るく賑やかだ。人々は普段と変わらず生活している。

あの嫌な予感はい過ぎだったみたいだ。

「レン、今日遊びに来る？」
「うんっ。」

じつと雪を見つめていた瞳は嬉しそうにこっちへ向いた。

「積もったらいいねえ。」

レンの言った言葉が、ふと昔の事を思い出させた。

「あっ、父さん雪だよ!!」
「お、本当だ。綺麗だな。」
「母さん雪ー!!」

ふわふわと落ちてきた白いものは、窓にぶつかっては消えていった。
僕は不思議に思った。

すぐに消えてしまう雪が、どうしてもあんなに綺麗に積もるのか。
見ていると地面につけば消えてしまう雪。

それなのに、次の朝には真っ白な世界が広がってた。

僕は雪が好きだった。

父さんと母さんと見る雪が。

降り注ぐ雪を見て、少し目が回った。
雪は綺麗すぎるから。

piece 6：手

父さん、あれ何？

ん？ああ、雪だな。

雪？

そう、雪。ユトは雪見るの初めてか。

うん。綺麗だね。

そうだな。

ねえ父さん。雪、手に乗せると消えちゃうよ。

そうだな。

地面に落ちても消えちゃうね。シャボン玉みたい。

そうだなあ。けどな、ユト。明日の朝、外を見てごらん。一面雪でいっぱいだから。

本当？すぐに消えちゃうのに明日の朝はいっぱいなの？

そう。不思議だろう？

うん！…綺麗だね。真っ白。

そつだな…俺たちもこのくらい…

ん？

なんでもないよ。さあ帰ろうか。寒くなってきた。

俺たちもこのくらい真っ白ならば

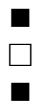
父さんの手は温かった。

piece 7：幸

強く 強く願った。

どうか僕らの未来が

ずっと幸せでありますようにと。



年が明けて、僕たちは何事もなく生活をしていた。
いつもと変わらない風景。
いつもと変わらない学校、友達。

ただ、もうすぐまた満月がやってくる。

レンはまた不安に思うだろうか。
そんなことを考えながら、ぼうつと授業を聞いていた。
今は歴史の授業。

過去にあった吸血鬼の暴走の話や、満月の話。
皆そんなものに興味もなさそうに眠そうな顔をしてた。

今はフィルターがあるから吸血鬼の暴走なんて有り得ない。
皆そう考えてる。

まあ、そうなんだろうけど…。

ただレンだけは真面目に余所見をすることなく話に聞き入っていた。

これはこの授業では毎回のこと。

そして授業のあと、必ずレンは僕に確認する。

「大丈夫だね。」

そして僕は必ず答えた。

「大丈夫。僕らの平和はそんなに簡単に壊れたりしないよ。」

毎晩祈った。

僕らの幸せがずっとずっと

ずっと続きますように。

ああ、どうか

神様。

■

満月の光は

吸血鬼を狂わせる。

この綺麗な綺麗な世界を

一瞬にして暗黒と血の色に染める。

人間はたくさんの努力と工夫をした。

平和を手に入れた。

けれど けれど

その平和 いつまで続く？

■
「天気いいね。」

本当ならこんな日は夜綺麗な月が見える。
けれど今日は見えない。

満月、だから。

まだ少し肌寒い季節。

学校が休みに入って、僕とレンは一緒に街へ買い物に出た。
街は賑やかだ。

たまにその辺りから満月の話が出る。

その声が聞こえる度にレンが不安そうな表情になった。

大丈夫だよ、と声をかけようとしたその時。

「そこのお二人さん。」

道端で見知らぬ男の人に話しかけられた。

真っ黒な服を着たその人の顔は、フードで隠れて見えない。

不思議そうな顔をした僕たちを見てなのかはわからないけれど、その男の人はふふつと笑った。

「君たちは友達ですか？」

質問されて、僕とレンは迷うことなくこくりと頷いた。
するともう一度、今度はさっきより少し大きく笑う。

「そうですね。…もうじき日が沈みますね。今夜はきっと綺麗な満月ですよ。」

今夜は綺麗な満月？

満月が見えるはずはないのに。

どうしてそんなレンが不安になるようなことを言っただろう。

無視してレンの手を引いた瞬間、街に大きなサイレンが鳴り響いた。

僕らの平和を 幸せを引き裂くサイレンの音。

ああ神様。

どうか どうか

これは夢だと。

これはなにかの間違いだと 言ってください。

僕らの幸せを 壊さないで。

piece 8：壊（前書き）

崩れてしまふ。全て全て。

piece 8 : 壊

母さん 母さん。
幸せって何？

幸せって何かしらね？
母さんの幸せは今ユトと父さんが傍にいることよ。

僕の幸せは何？

それはユトにしかわからないわ。
ユトはどんなとき幸せ？

えーつとね…ご飯食べてるときとか
寝てる時とか
あとは…母さんと父さんと一緒にいるとき。

そう。

幸せは皆違うのよ。

父さんの幸せも違うもの。

けれど、その幸せにも同じところがあるの。

どんなこと？

その人自身が作り上げた幸せだってこと。

作り上げた？

そう。

生まれてすぐ幸せな人はいないわ。

誰でも自分で自分の幸せを見つけて作るの。

そっかあ。

じゃあ僕もまだたくさん幸せ作れるかな？

ええ、きっと。

そしてその幸せを大事にしないとね。

うん。

母さん、僕らが作った幸せは、今崩れかけています。

鳴り響いたサイレンがやんで、世界中に放送が流れる。

『フィルターに異常が見付かり、使用できない状態です。只今早急に修理をしています。人間の皆さんは避難してください。繰り返しします。フィルターに……』

誰もが耳を疑った。

フィルターが壊れた？

僕らの幸せを守るフィルターが？

それは、僕らの幸せが壊れたのと同じこと。

ああ、どうして。

僕らは普通に生きていたいのに。

僕らの幸せを 壊さないで。

「フィルターが…壊れた？それじゃあ私達はどうなるんだ…」

静まりかえった街の中で一人の男の人が呟いた。
顔は真っ青だ。

「そうだ…このままでは私達は…」

「どうするんだ…早くどうにかしなくては…」

「私達は殺されてしまうのか…」

「やつらを…吸血鬼を地下に閉じ込めろ！！」

誰かの叫んだその言葉は、街にいた人間を支配した。

ついさっきまで親しく話していた吸血鬼を引きずり倒し、地下牢へ
放り込む。

吸血鬼達の悲痛な叫びが街に響いた。

泣き叫ぶ子供も人間達は容赦なく放り投げる。

これが僕らの世界？

どうして どうして。

誰か 助けて。

piece 9：月

狭い地下牢に無理矢理押し込まれて、多くの吸血鬼が押し潰されて命を失った。

押し潰されて骨がぐしゃりと折れる音、子供が泣き叫ぶ声、多くの吸血鬼が叫ぶ声が牢から聞こえる。

中の状況を想像するだけで気分が悪くなる。
きつと地獄よりも酷い状況。

「早く！早く奴らを閉じ込めろ！！日が沈む！！満月になるぞ！！」

「急げ！！殺されてたまるか！！」

「早く扉を閉めるんだ！！」

「もう外に吸血鬼はいないか！！」

「探せ！！一人も外に残すな！！」

こんなの僕らの世界じゃない。皆の平和は 幸せはどこへ行つてしまったの。

ただ呆然とその光景を見ていた僕をレンが引っ張った。

驚いている間もなく無理矢理フードを被せられる。

「ユト！目隠して！！」

レンは必死に僕の目を隠そうとフードを引っ張った。僕の瞳は金色。ハーフだけど、見た目だけでは普通の吸血鬼と変わらない。

見つかったら、僕も捕まってあの中に入れられる。

そんなことになったらレンを守ることなんてできない。

「ユト…どうしよう…怖いよっ…」

僕の手を握るレンの手が、小刻みに震える。
凄く怯えているのがわかる。

きっと今僕の手を握っているのも怖いだろう。ハーフとはいえ、僕の体には吸血鬼の血が流れてる。
でも、レンは手を離さない。僕を引き止めるようにしっかりと握っている。

「ユトっ…行かないで…嫌だよ…」

「…うん。心配しないで。僕は大丈夫。ここにいるから。」

僕はレンを守る。

僕だけはこの幸せを守りたい。
守らなきゃならない。

例え世界が滅びても。

滅びて しまふのだろうか。

僕らが生きてきた、作り上げたこの世界は。

「なぜっ…なぜなんだ！！我々が何をしたというんだ！！他に何か方法があるはずだ…！！」

懸命に叫ぶ吸血鬼の声は、地下牢の分厚い扉に遮られた。
この世界で初めて吸血鬼と人間の間に境界線ができた。

ああ、日が沈む。

外に残った人間達が一斉に空を見上げた。

綺麗な満月が浮かんでいる。

不気味な光を放ちながら。

「満月……だ。」

レンは呟いて、さらに強く僕の手を握った。

こんなに綺麗な満月の夜なのに、どうしてこんなことにならなきゃいけないんだろう。

吸血鬼だけが満月を見られないなんて、神様は 不公平だ。

父さんは満月を見たかったかな。

■
□ ■
□

人間はたくさん努力をした。

工夫をした。

また今夜も自分達の幸せを守った。

けれど けれど

それは本当？

彼等の幸せは 守られた？

綺麗な満月は

人間さえも狂わせた。

□
■
□
■

僕らの幸せを返してください。

こんなことにならないために

僕は努力をして生きてきたのに。

ああ、神様は僕らを見放したの。

懸命に生きる僕らを どうして。

飽きちゃったから。

どこからかそんな言葉が聞こえた気がした。

満月なんて見られなくていい。

僕は平和な日常が 好きなのに。

僕らはどうなってしまうの。

誰か教えて。

僕らは何か間違っていたの。

これは 罰なのだろうか。

神様教えてください。

僕らはこうなる運命だったのでしょうか。

piece 10：離

満月の夜は静かに終わり、朝が来た。

雪が 降っている。

ひらりひらりと舞う雪は、儚く消えていった。
儚く 消えて。

□ ■ □

大勢の人間が地下牢の入り口に集まった。

不気味なほど静まりかえった地下牢を、僕の隣のレンはじっと睨んでいる。

「開けて大丈夫なのか？」

「しかし開けないわけにはいかないだろう。」

「それもそうだな…。きっとわかってくれるだろう。」

大人たちが話し合い、地下牢の扉に手がかかった。

僕らの世界は 狂い始めた。

もうこの世界が出来たときから、狂っていたのかもしれない。

扉の向こうには、血生臭い光景が広がっていた。
これが昨日まで笑顔で生活していた生き物？

「いけ…ない。」
「え？」

レンがぼそりと呟いて、涙を流した。
すると、地下牢の中にいる吸血鬼達が入り口に集まっていた人間に襲いかかってきた。

一人、二人。次々と人間が息絶えていく。

これは何？夢？

夢なら覚めて。

こんな世界、見たくないから。

「ユトツ！！」

立ち尽くす僕の腕を、レンが強く引いた。
地下牢から無理矢理離される。

「レン！？」
「逃げなきゃ…！！もうここはいつもの世界じゃない…！！」

その通りだ。

これは、夢なんかじゃない。

世界が音をたてて崩れているのは、現実。

ああ、どうして。

その答えは、神様しか知らない。

■ □ ■

目の前で繰り広げられる惨劇。

血まみれの死体がごろごろと転がっていった。

それから、生々しく湯気が上がる。

血が熱いものだ、改めて感じた。

怒り狂った吸血鬼たちは、その怒りを抑えることなく人間たちを虐殺していく。

何が苦しいのか、悲しいのか、その瞳から大粒の涙を流しながら。怒りに身を任せるその姿は、さながら悪魔。

言い伝え通り、吸血鬼は悪魔へと姿を変えた。ただ、満月の夜じゃなかっただけ。

理由が、満月の光ではなくて、怒りと憎しみだっただけ。

ああ、滅びてしまふ。
すべてが。

「母さん達大丈夫かな…。」

僕と一緒に物陰に身を潜めるレンが不安そうな声をあげた。
レンは僕と違ってちゃんと人間の両親がいる。
すべての人間が襲われるなら、もちろんレンの両親も。

「家まで見に行こう。」

「でもここから出たら危ないよ。」

「隠れてたっていつか見つかるよ。それなら早くレンのお母さん達を助けにいかなきゃ。」

「…うん。」

お互いの手をしっかりと握り合って、物陰から人混みへと飛び出す。
走り抜けるその中で、殺戮は止まない。

血しぶきが、雨のように僕とレンに降りかかった。

同時に、味わったことのない吐き気が襲い掛かってくる。

抑えようのない嘔吐感。

吐きそうになるのをぐっと抑え込んで、なるべく周りを見ないよう
にまっすぐ走った。

後ろを走るレンのすすり泣きが、人々の悲鳴に混じって時折聞こえ
てくる。

最後の人混みを抜けようとしたとき、人と人に押し潰されてレンと

繋いでいた手が離れた。

急にいなくなつた熱を探そうと振り向くけれど、そこにレンの姿はもうない。

「ユトオ…！」

微かに聞こえたか弱い声も、悲鳴にかき消された。

* - * - * - * - * - * - *

「あーあ。大変大変。凄いことになってるよ。」

「何言ってるんだ。自分がやったくせに。」

「人聞きの悪いこと言わないでくれる？僕は試してみただけだよ。」

「そんなこと言つて、こうなるってわかつてたんだろう。」

「うーん、まあね。ただこれだけ続いたら試してみたくなくなるじゃない。どうなるのかさ。」

「どうなるのか、なんて、結局はお前が決められることだろう。」

「あははっ！そうだね。僕はカミサマだから。」

* - * - * - * - * - *

誰か助けて。

誰でもいい。

この世界を元に戻せる人がいるならば。

どうか。

どうか。

僕の命は尽きてもいいから。

お願いします。

神様。

父さん。

piece 11：化

ユトを探し回る間も人々の悲鳴は止まない。
血しぶきが容赦なく僕の体を染めていく。

左右から、下から苦痛に歪んだ人間の視線が飛んでくる。
吐気は酷くなる一方。

レンは無事かな。

名前を呼びながら探すけど、どこからも返事はない。
早く見つけなきゃ。

早く、しないと。

誰かに殺されてしまう。

「助けてくれええ!!」

一人の男の人が、僕のほうに助けを求めてきた。

だけど、僕の瞳を見ると歪んだ顔をさらに歪ませて叫んだ。

「化物… 来るなああああ!!」

『化物』？

僕が？

どうして。

僕は何もしてない。
何もしてないのに。

しりもちをついたその人間をただ呆然と見下ろしていると、後ろに忍び寄った吸血鬼がその頭を弾き飛ばした。頭を失った体がその場に倒れる。

うつすらと白くなつた地面を、赤黒い液体が侵食していった。そんな光景が目の前に広がっているのに、頭の中では『化物』という言葉だけが渦巻いた。

バケモノなんて、言わないで。

僕らも生きてる。

普通に生きてる。

吸血鬼たちだって、こんな風になりたいなんて望んでいなかった。

世界を壊したのは 貴方達じゃないか。

たった今人間をただの肉塊にした吸血鬼と目が合つて、正氣に戻つた。

こんなところで止まつてる場合じゃない。
レンを探さなきゃ。

「化物……!!」

違うよ。違う。

ねえ、そつだらう？

僕らは 化物なんかじゃない。

「化物、かあ。」

「酷いものだな。」

「でも確かに化物だよな。アレ。」

「お前が作ったんだろう。」

「そうだけどさ、ちょっと惨すぎない？」

「自分でやっておいて…。」

「ここまでなるとは正直思わなかったんだ。これならいつそ吸血鬼も人間も一気に滅ばしちゃう方が良かったかな？」

「そうすればまた後で『簡単に片付けるんじゃないかった』と後悔するだろう。」

「ああ、そうかも。…化物か。ふふっ…あはははっ」

「何を笑っている？」

「うっん。…本当の化物はどっちかなって思ってた。」

「…どちらも、だな。」

「レン！」

どこに行っちゃったんだろう。

家にもいない。

ただ、レンのお父さんがズタズタに引き裂かれて倒れてた。

無事、かな。

「レンー！！！」

かたんっ

物音のしたほうを振り向くと、レンが建物の陰に座り込んでいた。
何か抱えてる。

「レン…」

ゆっくりと近づくと、レンは怯えた目でこっちを見た。
暗くてわからなかったレンの抱えているものが、初めてなんだかわかった。

あれは、レンの お母さんだ。

でも、もう手遅れだろう。

それには右腕も左足もついてない。

血を流しながら、レンの腕の中で力なくぐったりとしている。

「レン……」

「……っ……な……!」

「え？」

「来るな化物お……!!」

レンが泣き叫んだその言葉は、僕の脳を突き抜けた。

嗚呼

嗚呼

神様。

何が悪かったんだろう。

僕らは何を間違っていたんだろう。

啞然としてレンを見つめる僕の瞳から、知らないうちに涙が流れた。

悲しいんじゃない。

苦しいんじゃない。

怖い。

そんなことを言われるくらいなら、いつそ、いつそ。

目の前のレンの首から上が、綺麗に吹き飛んだ。

勢いよく噴き上がった血しぶきは、薔薇の花びらの様。
一瞬何が起きたのか理解できなかった。

けれど、地面にごりと転がったレンの背後に立っていた吸血鬼の姿を見て、無理矢理理解させられた。

レンは、殺されたんだ。

僕ではない、アレに。

僕じゃない？本当に？

レンを殺した吸血鬼は、僕になんてまるで興味を示さずに身を翻した。

待つて。

僕も 殺していつて。

あ ああ ああああ あ

誰か僕を殺して。

piece 12：滅

嗚呼嗚呼

どうしてこうなった？

何が世界を狂わせた？

嗚呼 そうか

この世界は

最初から狂っていた。

□
□
□

弾き飛ばされたレンの頭を持って、街の中をふらふらとしばらくさまよった。

人間達の叫び声は、もう聞こえない。
滅びてしまった。

怒りと憎しみの標的がなくなった吸血鬼達は、僕と同じように街の中をふらりと徘徊するだけ。

僕には目もくれずに、ずるずると体を引きずっている。

「神様、助けてください。」

気持ち悪い。吐き気がする。

僕が今大事に抱えているのはなんだっけ？

そうか。これは

絶望の塊。

歩くのも辛くなって、狭い路地裏に座りこんだ。

体が重い。このままここで眠ったら、楽になれるかな。

楽に なりたい。

「彼は死なないんだろう？」

「そうだね。吸血鬼の血が混じっていれば寿命はないよ。」

「…これから事故が起こると思えないしな。そんなつもりはないだろう？」

「ないよ。もうこの世界に手を加えるつもりはない。彼は死ねないよ。病気にもならないからね。…彼が自ら死を選んで実行したなら別だけど。」

「…そうなるかもな。」

「吸血鬼達はすぐ滅びるよ。」

「なぜだ？」

「見てればわかるさ。」

目が覚めた瞬間、信じられない光景が目に見え込んだ。

吸血鬼が吸血鬼を喰っている。

辺り一面に生臭い匂いが充満して、僕の体を侵食しようとする。逃げなきゃ。

どこか別の場所へ。

レンと一緒に。

あの日から何日経っただろう。
吸血鬼は共食いで滅びた。

人間も吸血鬼に滅ぼされた。

この世界には もう 僕だけ。

何もかもなくなってしまった。

何もかも。

ただ呆然と立ち尽くすしかない。

僕はどうしたらいい？

どうしたら 楽になれる？

神様 僕を殺してください。

piece 13：神

「なぜ彼は殺されない？」

「さあ？『特別』だからじゃない？」

「『特別』、か。哀しい運命だな。」

「それ、僕に何か文句でもあるの？」

「いや。そういう訳じゃないさ。…そろそろ迎えにでも行ってやっ
たらどうだ。」

「なんで僕が。死にたければ彼が勝手に死ねばいい。僕には関係な
いよ。彼がどうなろうと次の世界には何も影響しない。」

「…ならば俺が行こう。」

「僕に許可なく勝手な行動するなよ。」

「…」

「そんな目するなよ。…まあ丁度退屈してたところだし、遊びに行
く位いいかな。僕が行こう。お前はここにいなよ。」

+*+*+*+*+*+*+*

どうしよう。

もう何も無い。

死んでしまったほうが楽かな。

「ねえレン…僕も君のところに行こうかな。」

空を見上げても、月が只静かに僕を見下ろしているだけ。

綺麗な、三日月。

いつもなら、こんな空の下で皆幸せそうに暮らしていたけれど

もう、無理なんだ。

「…レン…」

「こんばんはー」

久々に聞いた僕以外の生き物の声に、思わず肩が跳ねた。
とっさに振り向いたそこには、長い銀髪をなびかせた、一人の男の
人が立っていた。

「え…だ、誰…」

まだ生きてる人がいた？

この人は金色の瞳じゃない。
吸血鬼じゃない。
じゃあ、何？

「僕？僕はね、神様。」

神様？

この人が神様？

「…神、様？」

「そう。神様。…大変だったねえ。」

神様と名乗ったその人は、僕が抱えているレンを指さした。
鼻で少し笑って、指をぱちんと鳴らす。
すると、レンの目がぱちりと開いて僕を見た。

「っ…!!」

「でも楽しかった。やっぱりああいう醜い部分って見てて楽しいね。」

「あ、あなたが…アレをやったんですか…？」

「ん？フィルター？そうだよ。僕が壊したの。」

「どうしてっ…」

「どうして？飽きちゃったからだよ。もうこの世界に飽きちゃった

から。」

飽きた？

そんな理由で僕等の平和をあんなに簡単に奪い取った？

こんな人が、神様？

「そんなに睨まないでよ。君には悪いと思ってるさ。君は死ねないんだものね。可哀想に。」

「そんなことじゃなくてっ…！どうして…僕達は幸せに暮らしていたのに…！！」

「それが飽きちゃったんだってば。平和すぎて何も面白くないんだもん。少し悪戯したくなるじゃない。いき過ぎて壊れちゃったけど。僕達神様はね、一人一人ひとつずつ世界を持つてる。それぞれが好きなように世界を作れるんだ。」

「僕達…？」

「あれ、神様って一人だと思ってた？神様なんて腐るほどいるよ。世界はここだけじゃない。いろんな世界があるよ。質や様子はその世界の持ち主の性格によるけど、絶えず殺戮を繰り返す世界を作ってる奴、何も起こらないつまらない平和な世界を作ってる奴、怠けて世界をどうにもしない奴。色々さ。僕はね、実験して遊んでるの。」

「実験？」

「そう。どの種族の組み合わせが一番面白いか調べてるの。色々試したけど、今回が一番続いたかな。人間と吸血鬼。案外長く続いた

の、予想外。」

そんな風に、実験だなんて思って

「今まではね、悪魔と人間とか、天使と人間とか、獣人と人間とかやっただ。一番短かったのは悪魔と人間で、二週間で世界が滅びちゃった。まああれはあれで面白かったけどね。」

この人は
一体

「あなたは一体何を何だと思っているんですか…」

「ん？何って、僕の玩具。」

玩具？

一生懸命生きてるのに。

懸命に、幸せを作って生きているのに。
それを、どうして。

「玩具じゃない…僕達は玩具じゃない!!」

「そんな怒らないでよ。僕はね、君にプレゼントをあげに来たんだ。」

僕の玩具

僕の玩具

僕の玩具

もっと苦しんで

もっと悲しんで

踊り狂え。

piece 14：願

「なんだ、あいつまたやったのか。」

「ああ、大神官。ええ、まあ。」

「お前も大変だな。」

「慣れました。」

「ははは。…あいつあんなところで何をしてる？」

「…哀れな運命の少年を助けに…助けにいったのではないかもしれませんが。」

「あいつが誰かを助けるようなことをするとは思えないな。自分が何かを得るためにしか動かない奴だ。」

「…ええ。」

* * * * *

「プレゼント…？」

「そう。辛い思いをさせたからね。君の願いをなんでもひとつ叶えてあげるよ。」

「願いを…なんでも？」

「うん。僕は神様だから、なんでもできるよ。」

僕が、望むもの。

一番に、願うことは。

「…レンくんを生き返らせることもできるよ。」

「え…？」

「レンくんを生き返らせて、君も人間になって次の世界でまた二人で生きる？」

「…ついいい！…それは…願わない…。」

「どうして？レンくんは君の親友じゃない。」

レンは僕の親友だ。

でもそれは、僕にとっただけであって。

レンは僕を、『化物』と呼んだ。

「……父さんが言ってた言葉、やっと理解できたんだ。」

「『愛しているから、殺した』？」

「…愛している人を殺すなんて、わからなかった。なんでそんなことするんだって、思ってた。…でも僕は…」

あの時、必死にレンを探したのは、レンを助けるためじゃなかった。

誰か、他の誰かに殺されてしまう前に

僕が この手で

殺したかった。

「……『化物』って呼ばれてたもんね。許せないよね。一緒にまた生きる気にはなれないよね。」

「違う！！僕は……」

僕が許せないのは

僕自身。

「……ま、なんでもいいけど。僕忙しいんだ。次の世界、どの組み合わせで創るか考えなきゃならないんだから。」

「教えてください……僕達が生きてきた世界は……なんだったんですか……？」

あんなにも幸せだった、喜びの満ち溢れたあの世界は

「夢、だったんじゃないの。儚く消えてしまっ、夢だったんだ。」

夢？

僕は永い夢を見ていた？

それならば

「僕の願いを、なんでも叶えてくれるんですよね？」

「もちろん。」

「それなら…どうか…この夢に終わりを。」

もうこんな悲しみを生み出す夢を終わりにしてください。

こんな悲しみを、苦しみを、絶望を味わうのは僕達だけで充分だ。

もう、終わらせてください。

「…それはつまり、種族の違う世界を創るかと？こんな憎しみの溢れた形で、世界を滅ぼすかと？」

「僕の願いを叶えてくれるんですね。」

「…わかったよ。この夢に、終わりを、ね。やってくれるじゃないか。それで、君はどうするの？」

「僕は…自分は自分でどうにかします。だから…どうか」

「わかったよ。わかったってば。もういい？」

「…はい。」

僕が頷いたのを確認して、神様は風のように消えた。

嗚呼

これで終わりになる。

「ねえレン、これでよかったよね。」

+・+・+・+・+・+・+・+・+・+

家に戻ってきた。

レンの亡骸は、埋めた。

家はぼろぼろに崩れている。

元は物置があった場所を掘り起こして、刀を探す。

父さんが、母さんを殺した刀。

「…あつた」

父さん、母さん、レン。

僕も今、そこに。

「僕はもう、夢は見ないよ。」

◦
•
✱
◦
•
◦
+
•
◦
•
◦
•
✱

piece 15：終

いった？

ああ。心臓を一突き、だ。

そう。あーあ、行くんじゃないかった。気分最悪。あんなに胸くそ悪いヤツだと思わなかったよ。

胸くそ悪い…か。

さて、今度はどの組み合わせで創ろうかな。

…彼と約束したんじゃないのか。

何を？

…お前は彼の気持ちを踏みにじるのか。

なんだよそれ。その言い方むかつく。あんな玩具の言うこと僕が本気で約束するわけないだろ。

お前は俺の言うことだって聞いた試しがないだろう。

お前の頼みなら聞いてやらないこともないけど？

言ったな。本当だな？

しつこいよ。

ならば俺からも頼もう。

この夢に、終わりを。

… お前までそれを言うの。何をあんな玩具の為にむきになってるんだよ。馬鹿みたいだ。

聞かないのか。

… つるさいな！！… わかったよ。人間だけの世界を創る。それから後は僕は何も干渉しない。それでいいんだろ。

ああ。

その代わり、僕の楽しみを奪ったんだ。お前もなにか差し出せよ。

俺は俺しか持っていない。俺を下に落とせ。

お前も人間として暮らしていくつもりなの。

ああ。

あんな醜い玩具になって生きるの。

ああ。

… やっぱり馬鹿だよお前。

馬鹿でもいいさ。

+*+*+*+*+*+*+

さあ目を閉じて。

これからは覚めることない夢をみようか。

幸せな、幸せな夢を。

もうあの悪夢は終わったから。

何も恐れることはない。

ただ 静かに。

last piece：始

「おはよう。」

「おはよ。あ、蓮。課題やった?」

「やったよ?...何、また?」

「よろしく!」

「まったく...。今度奢ってよね。」

「さんきゅ!」

今日もいつもと変わらない一日が始まった。
友達の蓮に課題のノートを貸してもらって、写し始める。
と、そこに聖が入ってきた。

「お前また課題やってないのか。」

「あ、聖おはよう。そうなんだよ言ってやってよ。」

「たまには自分でやったらどうだ?悠斗。」

「だってさ...めんどうなんだよこついの。」

「それを僕や聖はちゃんとやってるんだけど?」

「まあ今回は最後だな。」

「だねー。」

「ええ？そんなケチなこと言っなよ二人ともー！」

こんなやりとりももう毎日のこと。

三人でいるのが一番幸せで、楽しい。

この間、ずっと昔吸血鬼が生きていたという噂を聞いた。

長い間続いたその世界も、人間の憎しみのせいで滅びたって。

でもよく考えればその噂も怪しい。

人間も吸血鬼も滅びたなら、この今の世界はないはずなんだし。

それにこんなに幸せに溢れた人間が、世界を滅ぼすほどの憎しみを
持っているなんて、僕には思えない。

第一吸血鬼なんて、いるはずないんだから。

「おはよー！なあこれ見た！？」

「なんの記事？」

「人間以外の血が混ざった子供が生まれたんだって！！今調査中らしいけど、もしかしたら噂になってる吸血鬼の子供かも！！」

さあ夢の始まり。

また楽しい夢を見よう。

僕の玩具達。

一緒に遊ぼう。

+*+*+*+*
E n d . . .
+*+*+*+*

l a s t p i e c e : 始（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございます。
また新連載で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2888a/>

この夢に終わりを

2010年10月10日15時21分発行